

[67]文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339146>

出版情報：文學研究. 67, 1970-03-25. Faculty of Literature, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

「文学研究」筆者別索引(筆者はA B C順による)括弧内は輯号を示す)

有田忠郎

「悪の華」の統一性について(五一)

詩と近代世界(六〇)

—フランスの場所を中心とする一つの覚え書—

詩と近代世界(六一)

—初期のヴァレリーをめぐって—

サン・ジョン・ペルス「流調」一(六二)

—翻訳と註解の試み—

千代正一郎

独逸的なるもの(三三)

福田良輔

奈良朝時代東国方言の成立について上(三七)・中(三八)

奈良朝時代東国方言成立に関する諸問題(四二)

—亀井孝氏・金田一博士の批判に答えて—

古事記の純漢文的構文の文章について(四四)

筑前国志賀白水郎歌百十の作者の複数性について

—表現形式と伝誦性とを中心に—(四六)

古代語法存疑—エ列音の連体形—(四八)

古代語法存疑—久語法について—(五〇)

奈良時代東国方言の周辺

—言語基層・八丈方言・補説—(五三)

奈良時代東国方言の音韻状態一(五六)

古代日本語に現われてゐる動詞型連用形の特異形について(五七)

古代日本語における復語尾の四段活「る」の一考察(五九)

中央語系日本語における音節結合

—有坂法則について—(六〇)

表記法から見た万葉集卷十四の成立について(六一)

ア列音の活用機能とク語法(六五)

芳賀敬治

イアゴの動機をめぐって(六〇)

樋口忠治

トオマス・マンの「すげかえられた首」の問題(六〇)

今井源衛

花山院研究一(五七)・二(五八)・三(六一)

「八重葎」に就いて(五九)

松平文庫本「光源氏一部詠」翻刻上(六二)・中(六四)

紫式部の出生年度(六三)

枕草子の古注釈書—素行筆本について—(六五)

戒仙について—業平から貫之へ—(六六)

松平文庫本「光源氏一部詠」翻刻(下)(六七)

春日和男

指定表現の様式—発生過程よりの考察—(五〇)

<p>「花桜をる少将」における語彙—小弓その他—(五二) 下照姫の歌—歌格と提示法と—(五二) 「也」字の訓読考 —「なり」の表記としての「也」字—(五四) 聴覚および視覚による表現上(五六)・下(六〇) 指定辞「たり」雑考 —特にその発生と用法と—(五七) 草仮名による字音表記(五八) 慶長十五年間書五逆秋(無門関鈔)の国語学的研究— 貞享三年書写—(六一) —序 指定辞の様式—(六一) 前田家本日本靈異記の性格—「師自夏傘之」考—(六五) 説話文体の効用—「今昔考」の終りに—(六六)</p>	<p>春日政治 片仮名交り文の起源に就いて(二) 古訓漫談(二) 「小学方言講義」より(四) 高野山にて観たる古点本二(七) 宇治拾遺物語の一本より(九) 金光明最勝王経註釈一本の古点について(一四) 法王帝説読考(二二) 聖語藏御本央掘魔羅經の字音点(二三) 古訓語彙小攷(三三)</p>		
<p>一八五〇年和訳の馬太伝(三六)</p>	<p>片山正雄 文学科概説(二)</p>	<p>国松孝二 愛と憎しみ—「ニーチュと古典文献学」の一章—(三五) 運命への目覚め(三六) ドイツからの脱出 —ニーチュの個人主義の基底について—(三八) ゲーテの革命劇をめぐって(三九) ニーチュについて(四〇)</p>	<p>小島吉雄 明治初期の歌論(一) 宗祇の晩年(三) 新古今和歌集の撰集態度と撰集事業(五) 所謂石津本新古今和歌集に就いて(八) 連歌における美的情調一(一一)・二(一二) 新古今集歌風と註釈の問題(一八) 春日博士所蔵二十一代集中の新古今和歌集に就いて(二三) 後鳥院の御文学(二五) 新古今集写本に於ける撰者名の頭書について(二八) 新古今集伝本考(三〇) わが国近世の運命悲劇(三三)</p>

<p>見るに随ひて(三四) 池袋清風の訳詩(三五) 「奥の細道」覚書(三七) 芭蕉の「荒海や」の句について(三八)・二(三九) 歌集「みだれ髪」を論ず(四〇)</p>	<p>小 牧 健 夫 ヘルデルリンのエトナ劇断片(二) クライストの「公子ホンプルク」の二問題(六)・二(八) 銀の鈴(一一) ゲーテの従軍記(一五) ヘルデルリン 半神観一 (二二)・二(二四)・三(二六) 菜花行(二三) クライスト随想(二八) 独逸浪漫主義の諸問題一(三〇)・二(三二) 正岡子規とレッシング(三三) 西方寺の庭(三五) われもまたアルカディアに(三六) 砂に書く(四〇)</p>	<p>小 室 光 弘 土と文芸(三三) 小 西 昇 後漢に於ける楽府詩流行の状況について(六〇)</p>
<p>漢代楽府詩における詩経の連想的表現方法の衰減(六一)</p>	<p>前 川 俊 一 ワーズワースのソールズベリーティンターン旅行(三七) ワーズワースにおける自然観の進展(三八) ワーズワース「辺境の徒」について上(四〇)・中(四二) バイロンの「ドン・チュアン」(四一) 「壮大なる耳目の世界」上(四五)・中(五五)・下(六四) —ワーズワースの空間感覚、其他について— 英京雜記(五二) ルーシー詩群について(五四) ワーズワースとデイヴィッド・ハートレーの哲学上(五七)下(五八) コウルリッヂ「老水夫の歌」訳(五九) ワーズワース「序曲」冒頭五行の創作年代について(六一) 「ひとり麦刈る乙女」考 —「壮大なる耳目の世界」拾遺—(六五) イエイツ愛憐詩抄—試訳—(六六) ヴィクトリア朝詩雜抄(六七)</p>	<p>丸 田 裕 子 「嵐ヶ丘」の語り手ネリイ・ディーンに関する一考察(六二) 松 枝 茂 夫 鏡花縁の話—異国廻りを中心として(二六)</p>

<p>蝶菴居士張岱 (二八) 菜天寥とその一家 (三〇) 醒世姻縁伝の話 (三二) 郝蘭皋の随筆 (三三) 儿女英雄伝の面白き (三四) 金聖歎の水滸伝 (三五)</p>	<p>松田 伊作 アナト神話—ウガリット語研究覚書Ⅰ (六五) クリト叙事詩(1)—ウガリット語研究覚書Ⅱ (六六)</p>	<p>松浪 有 FUNCTIONAL DEVELOPMENT OF TELPRESENT PARTICIPLE IN ENGLISH Part I (六三)</p>	<p>村山 七郎 権左 (ポモルツェフ) ア・ボグダーノフ共著、簡略文法について (六六) DYBOWSKI のシムムシユ鳥アイヌ語資料について (六七)</p>	<p>目加田 誠 填詞選訳 (一三) 民国以来の中国新文学 (一四) 雅に就いて (二〇) 白楽天の諷諭詩 (二三) 幽詩考附東新考 (二五)</p>
<p>詩経に詠はれた自然界 (二七) 陳碩甫伝 (二九) 春秋の断章賦詩に就いて (三一) 詩教 (三三) 文心雕龍 (三四)(三五)(四〇)(四一)(四七)(六〇)(六一) 洛神賦 (三六) 六朝文芸論に於ける「神」「氣」の問題 (三七) 詩格及び詩境に就いて (三八) 李笠翁の戯曲 (三九) 曹禺の戯曲 (四二) 王維—安史の乱と詩人たち (四三) 楽府についての一考察—民歌と文人の詩との問題—(四五) 水滸伝解釈の問題 (五〇) 聞一多評伝 (五一) 孽海花 (五四) 礼教喫人 (五六) 二人の宝玉 (五七) 九歌試訳 (五八) 紫陽花 (六三) 「文学研究」の思い出 (六五)</p>	<p>森永 隆 謝恩 (三三)</p>			

毛利可信

英国中世詩解釈ノート(五八)
中世英詩「シシリートのロバート」試訳(五九)
内部言語形式ノート―意味の探求―(六〇)

森山 隆

上位オホラ音節の結合的性格(六〇)

元田 脩 一

『アッシャー家の崩壊』とゴシック・ロマンス(六三)
『ねじの回転』の諸解釈上(六四)・下(六五)
トルーマン・カポーティ「遠い声、遠い部屋」の限界(六七)

永田 英 一

ヴィニーの哲学詩について(三三)
アンドレ・シユニエ(詩人と市民)(三五)
スタール夫人「ルソーについての書簡」(三六)(四〇)
ルソー『マルゼルブ氏への四通の書簡』(三八)
ルソー「対話録」余聞(四二)
ダランベール「ジュネーヴ論」(四四)
ジュネーブ市民(ルソーについて)(四六)
ルソー『学問芸術論』の背景
―テイジョン・アカデミー―(四九)
アンドレ・シユニエの政治的散文 一(五〇)・二(五五)
アンドレ・シユニエ覚書 一(五一)・二(五六)

アンドレ・シユニエとイギリス(五二)

ルソー『ボームン猊下への書簡』

―ジュネーヴとの関連において―(五三)

ルソーとヴォルテール(五七)

ビュマン述『ジャン・ジャック・ルソー讃』(六一)

ラッパシュ編『アンドレ・ド・シユニエ全集』

―一八一九年の「解説」について―(六四)

モーリス・バレス述『ルソー生誕二百周年』(六五)

アンドレ・シユニエの政治的散文(三)
―「ジャコバン党」―(六六)

中村 幸 彦

西鶴における創作意識の推移(五八)

江戸時代上方における童話本(五九)

翻刻玄旨公御連哥(六〇)

林羅山の翻訳文学

―「化女集」、
「狐媚鈔」を主として―(六一)

柳里恭の誠の説(六三)

印刷の時点―仮名草子小考―(六五)

五井蘭洲の文学観(六六)

中山 竹二郎

「貧者の友」ウイリアム・ラングランド(二)

イギリスの中世の宗教劇(五)

<p>イギリスの古劇の詩形について(九) チョウサアと現代英語(一一三) 散文韻律について(一九) チョウサアに於ける措辭的特徴について(二二) ウェリイの英訳『源氏物語』(二二三) チョウサアその生涯と性格(二二七) キャンタベリ巡礼の世界(三〇〇) チョウサア二面性(三三三) 『サ・ガウエインと緑の騎士』について(三四) メリデイスの詩について(三五) チョウサの『トロイルスとクリセイデ』(三六) ソオロウとその生活観(三七) 英文学と貧困(三八) イギリス宗教劇の世俗化(三九) ウェイクフィールド劇『第二羊飼の段』(試訳)(四〇) 『ヨーク劇』「イサク人身御供の段」(四二) ル・モルト・アルテュール(四四) 頭韻式「モルト・アルテュール」について(四七) 憶出と偶然(五七)</p>	<p>成瀬 正一 十八世紀に於ける文芸サロン(一一)(一二) 新旧両派の文芸論争(七)</p>
<p>モンテーニュと東洋の悟道(二六) 旅行報告書(二六)</p> <p>西田 越郎 シュティフターについて(四三) ワルテル・フォン・デル・フォーゲルワイデについて(四五) ワルテル・フォーゲルワイデの Elegie と Kreuzlied(四六) ゲオルク・ビュヒナー 一(四八)・二(四九) ワルターの宗教性について(五〇) ハイインリッヒ・フォン・モールンゲン—ミンネの一形態— (五一) ヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデ 二(五三) 「バルテファル」における Ieit の問題(五七) Überfrendung について—一つの報告—(六五)</p>	<p>野上 豊一郎 杉田玄白とその周囲の人たち(一九) 使徒瞥見(三五)</p> <p>大江 三郎 日本語中の外来語における母音呼応(六六) Perfect and Progressive in English Transformational Grammar(六七)</p> <p>岡村 繁 唐末における曲子詞文学の成立(六五)</p>

小野島 行 忍

サッカ・パンハ・スタッタ (三)
リッ・サンハラ (一〇) (一一) (一三)
訳梵漫語 (一三)
梵詩メーガ・ゾータ散文訳 (二八) (二九) (三一)
草枕そぞろごと (三三)
梵語奈留別誌 (三四) (三六)

ペロル (ジャン)

Littérature, Langue française et monde moderne (六一)

笹 月 清 美

天平八年の遺新羅使一行の歌 (一三)
古事記の文芸的性質に関する認識の発展 (一七)
文芸活動の機構 (二一)
本居宣長における道と文芸 (二三)
語意考の成立過程を示す二・三の伝本について (二六)
本居宣長の国語研究 (二九)
小林歌城のテニオハ説 (三一)
富士谷御杖の言語論について (三三)
夕顔 (四〇)

佐 藤 通 次

世界の極性とゲーテの「ファウスト」 (一)

雅歌 (四)

生の悲劇性 (八) (九)
「思う」と「考える」 (一〇)
教・性・格と体験 (一四) (一六) (一七)
「老」と「親」とについて (二二)
創世神話とわが民族の原体験 (二三)
「生む」の論理的構造 (二五)
「超人」の事行論的解放 (二七)
表現の二契機―「見る」と「生む」と (二九)
文芸学の志気―「ファウスト」研究に寄せて― (三一)
歴史と形態変化―ゲーテの研究の一齣― (三三)
創刊の頃 (四〇)

重 松 泰 雄

啄木の社会思想について (四三)

進 藤 誠 一

「フィガロの結婚」とポマルシエ (一)
ユージエヌ・ラビッシュの喜劇 (六)
スクリーブの功罪 (八) (九) (一一)
コメディ・フランセーズの沿岸 (一四) (一五)
十九世紀中葉以後に於ける仏蘭西風俗劇 (一八) (二五)
日本に於けるコメディ・フランセーズ (三三)
モリエールの結婚 (二七)

<p>マリヴォー覚書(二九) フランスに於けるイタリア人劇団の業績(三二) (三四) 「ブリタニクス」から「五大力」へ(三三) 作者兼俳優(三五) フランス最古の喜劇(三六) モリエールの芸風について(ノート) (三九) マダム・ド・ロングヴィルの生涯(四〇) (四五) ルニヤールの喜劇(四三) ランブイエ侯夫人のサロン(四七) (五〇) 中山さんと私(五七) 感想(六一)</p>	<p>白石 悌 三 一宗匠誕生の周辺―水間沾徳覚書一(六二)</p>	<p>杉浦 正一郎 「奥の細道」の制作心理(四一) 「花屋日記」の著者俳人文暁の研究(四三) 鷗外博士の俳句観、及び其の俳句について(四四) 九州蕉門の研究―枯野塚と『枯野塚集』―(四五) 九州蕉門の研究―二 『漆川集』と筑前嘉穂俳壇について―(四六) 死に近き芭蕉―芭蕉の曲翠宛新資料書簡を中心に―(四八) 九州芭蕉門俳諧史概説(四九)</p>
<p>芭蕉連句研究―「升貫て」の巻(五〇) 芭蕉連句研究―「けふばかり」の巻・「芹焼や」の巻(五一) 芭蕉連句研究―三「松風」の巻(五三) 芭蕉連句研究―四「此の里は」の巻(五五) 素堂の真蹟二種について(五六)</p>	<p>高木 市之助 吉野の鮎(二七) 国見放(三〇) 牡丹芳(三三) 玉島川仙媛放(三五) 酒仙供養(三六) 思出十年―私本位に書きつづるところの―(四〇)</p>	<p>高橋 義 孝 芸術学、芸術史における没価値性の意味 ―ウェーバーの一論文を中心に―(四〇) トーマス・マンのフロイト論(四一・四二) 創造的余剰(四四) 「統一ヨーロッパ」意識の現代ドイツ文芸理論における諸 反映―(四五) 文学と社会との連続・非連続の問題(四六) 芸術は「進歩」するか(四九) 能の美学・序説(五〇)</p>

<p>ルカーチュの論文「上部構造としての文学」に対する批判 (五一)</p> <p>文学研究に対する「精神分析」の諸寄与一 (五五)・二(五六)</p> <p>芸術的感動について</p> <p>—文学研究に対する「精神分析」の諸寄与(その三)(五七)</p> <p>メフィストフェレス考(五八)</p> <p>世阿弥「花」と「物まね」(六一)</p> <p>芭蕉小論—ある論稿断片(六二)</p> <p>美とイデオロギーと文学(その一)(六四)</p> <p>Thomas Mann in Japan zu seinem 12. Todestage (六五)</p> <p>マルクス主義の光の下に見られたゲーテの『ファウスト』 —ルカーチュの『ファウスト論稿』—(六六)</p>	<p>田中 晃</p> <p>表現の構造(一六)</p> <p>万葉歌人の国家思想(一八)</p> <p>行為と哲学(二〇)</p> <p>日本の現実主義と「ものあわれ」(二三)</p> <p>生成の根拠としての自然(二五)</p> <p>田中 栄一</p> <p>Musset の作品にあらわれたイタリヤ(六五)</p>
<p>豊田 実</p> <p>日本に於けるシェイクスピア紹介の歴史(一)</p> <p>英吉利漂物邦訳考(四)</p> <p>芥川龍之介とエドガ・アラン・ポオ(七)</p> <p>基督教聖書和訳の歴史(一一)</p> <p>故坪内博士の『英文小学読本』(一二)</p> <p>日本に於けるシェイクスピア(一六)</p> <p>日本に於ける英文法紹介及び研究の歴史(二〇)</p> <p>俳句と英詩(二三)</p> <p>生活、文化の反映としての英語史緒言の一節(二六)</p> <p>言語起源の問題—英語史「第一部概論」の緒論—(二九)</p> <p>言語を通して見る英人祖先の生活—大陸時代—(三一)</p> <p>日英語音の異同と国民性(三三)</p> <p>人及び作家としてのシェイクスピア(三五)</p> <p>シェイクスピアの女性観(三六)</p>	<p>鶴 久</p> <p>上代特殊仮名遣の消滅過程について —「野」字の変遷をめぐって—(五五)</p> <p>ウェリントンズ(N・G)</p> <p>The New Poetry(六一)</p> <p>矢島 徹輔</p> <p>庚信の絶句体詩における文学意識の転換(六五)</p>

「文学研究」発行年月一覽表

第一輯 昭和七年三月 第廿輯 昭和十二年十月
 第二輯 昭和七年十月 第廿一輯 昭和十二年十一月
 第三輯 昭和八年二月 第廿二輯 昭和十三年三月
 第四輯 昭和八年三月 第廿三輯 昭和十三年十月
 第五輯 昭和八年八月 第廿四輯 昭和十三年十二月
 第六輯 昭和八年十月 第廿五輯 昭和十四年六月
 第七輯 昭和九年一月 第廿六輯 昭和十四年十二月
 第八輯 昭和九年五月 第廿七輯 昭和十五年七月
 第九輯 昭和九年十月 第廿八輯 昭和十五年三月
 第十輯 昭和九年十二月 第廿九輯 昭和十六年八月
 第十一輯 昭和十年四月 第卅輯 昭和十六年十二月
 第十二輯 昭和十年七月 第卅一輯 昭和十八年六月
 第十三輯 昭和十年十月 第卅二輯 昭和十七年十二月
 第十四輯 昭和十一年十二月 第卅三輯 昭和十八年十二月
 第十五輯 昭和十一年四月 第卅四輯 昭和二十年三月
 第十六輯 昭和十一年七月 第卅五輯 昭和二十一年三月
 第十七輯 昭和十一年十月 第卅六輯 昭和二十二年三月
 第十八輯 昭和十一年十二月 第卅七輯 昭和二十三年三月
 第十九輯 昭和十二年五月 第卅八輯 昭和二十四年十二月

第卅九輯 昭和廿五年三月 第士輯 昭和卅八年三月
 第四十輯 昭和廿五年十一月 第士三輯 昭和卅八年九月
 第士一輯 昭和廿六年三月 第士三輯 昭和四十年三月
 第士三輯 昭和廿六年十一月 第士五輯 昭和卅三年三月
 第士五輯 昭和廿七年三月 第士五輯 昭和卅三年三月
 第士七輯 昭和廿七年十二月 第士七輯 昭和卅四年九月
 第士九輯 昭和廿八年三月 第士七輯 昭和卅五年三月
 第士一輯 昭和廿八年八月
 第士三輯 昭和廿八年十二月
 第士五輯 昭和廿九年三月
 第士七輯 昭和廿九年七月
 第士九輯 昭和廿九年十二月
 第士一輯 昭和三十年三月
 第士三輯 昭和三十年六月
 第士五輯 昭和三十年十二月
 第士七輯 昭和卅一年三月
 第士九輯 昭和卅一年九月
 第士一輯 昭和卅二年七月
 第士三輯 昭和卅二年三月
 第士五輯 昭和卅三年三月
 第士七輯 昭和卅四年七月
 第士九輯 昭和卅五年三月
 第士一輯 昭和卅六年三月